

# vajra 考

渡辺章悟

## はじめに

vajraは一般に金剛と訳されるが、ダイヤモンド (diamond) という意味と、電撃 (thunderbolt) という両義があり、従来しばしば混同されて用いられている。前者であれば、他のすべてを砕く最も剛いものであり、後者であればすべてを切り裂く破壊的力というほどの意味であろう<sup>1</sup>。しかし、仏教文献の中で用いられる場合、それがどちらであるのか、あるいは別の意味であるのか曖昧であり、経文の理解を困難にしている。

そこで最初に (1) vajraという語の言語的な分析をおこない、(2) リグ・ヴェーダ(RV)を中心として、古代インドの宗教文献中で説かれるvajraとその後の展開について検討する。

本来であればこれに次いで、(3) インドのvajraが何らかの接点を持つと予想される古代ギリシャの稲妻に着目し、その文化史的な意味を考察し、その上で、(4) vajraがインドラとヴァジュラパーニの持ち物となってゆく経緯、(5) ダイヤモンドと訳される理由、(6) vajraの破壊力が内化される意義などを解明するつもりであったが、筆者の怠惰のために所期の目的を果たすことができなかった。そこで本稿ではvajraの言語的分析にとどめ、後半(3)～(6)はまた別の機会に譲る。

## 第1章 vajraの語義分析

### 1. vajraの意味

最初に印欧語の語源を見てみたい。まず、ターナー (R.L.Turner) の『比較印欧語辞典』<sup>2</sup>ではvajraは男性名詞でthunderbolt、男性名詞と中性名詞でdiamondとする。また、マイヤホーフエル (M. Mayrhofer) の『古代インド語源簡略辞典』<sup>3</sup>でも、DonnerkeilとDiamantという2つの訳語

が挙げられる。このように印欧語の祖形の意味としてはこの二義に込められるようである<sup>4</sup>。ただし、ターナーでは前者の出典は、『リグ・ヴェーダ』であり、後者は『サッドヴィンシャ・ブラーフマナ』(Śaḍviṃśa Brāhmaṇa)であるというし、マイヤホーフエルによれば、前者は『リグ・ヴェーダ』など、後者は「ブラーフマナ」や『マヌ法典』などで用いられるという。

次に最も詳細な解説で定評のあるベートリンクとロートによる『梵語辞典』を見てみよう。本辞典によれば、vajraには以下のような19種類もの訳語があげられている<sup>5</sup>。

1) m., n. インドラの雷鳴, 雷霆らいてい (Indra's Donnerkeil), 2) n. 電撃のような言葉で, vāc, vākyaともに用いられる。3) m. 軍隊の陣形vajra-vyūha, 4) m. 柱の形, 5) m. 月の形, 6) n. 坐相vajrāsana, 7) m., n. ユーホルビア (euphorbia), カリロク (詞梨勒haritakī) (シクンシ科の高木)などの植物名, 8) n. 星座, 9) m. 時の分割, 10) m. ソーマ酒, 11) m. 懺悔, 12) m., n. ダイヤモンド, 13) n. 鋼, 14) n. 滑石のような性質, 15) m. 堅固に塗り込まれた漆喰, 16) n. 子供あるいは弟子, 17) m. AniruddhaやViśvāmitraの息子といった固有名詞, 18) f. 女性形vajrāで植物名, Durgā女神の足, Vaiśvānaraの娘の名前, 19) vajrīという女性形でユーホルビア (euphorbia) 属の [多肉性] 植物 (トウダイグサ科)<sup>6</sup>。

語義としてあげられた19種類中で最も詳細に説明されるのは、1) の「インドラの雷霆」の項で、vajraの項全体の半分がこの語義説明に費やされ、多くの出典が明記されている。それらは主に、ヴェーダ (R̥g-v., Atharva-v.), ブラーフマナ (Aitareya-B., Śata-B., Pañcav-B., Śaḍv-B.), ウパニシャッド (Kaṭha-U.) などのヴェーダ文献が中心であるが、『パーガヴァタ・プラーナ』、『マハーバーラタ』、『ハリヴァンシャ』、『ラグヴァンシャ』、『カターサリットサーガラ』などの文学文献からも幅広く引用されている。

次に、12) のダイヤモンドが重要である。この項の解説は第1の語義に比べるとずっと簡潔な記載となっているが、特徴的なのはその引用文献である。ここでは『マハーバーラタ』、『ハリヴァンシャ』、『ラグヴァンシャ』、『プリハットサンヒター』、『ニーティサーラ』などの文学・教訓詩の類に限定され、ヴェーダ文献からの引用は見られない。この傾向

は先のターナーやマイヤホーヘルの印欧語辞典にも共通している。これは偶然であろうか。あるいは編者の恣意的な操作なのであろうか。

次に文学書からの記載が多いアプテ [Apte 1986]<sup>7</sup> をみてみたい。本書によれば、vajraは以下のように4つに区分されて記載される。

(1) 形容詞 (vajra)

1) hard, adamantine; 2) severe; 3) forked, zigzag; 4) cross

(2) 男性及び中性名詞 (vajrah, vajram)

1) a thunderbolt; 2) any destructive weapon like the thunderbolt;  
3) a diamond-pin; 4) a diamond in general, an adamant; 5) sour gruel<sup>8</sup>

(3) 男性名詞 (vajrah)

1) a form of military array; 2) a kind of <Kuśa> grass; 3) name of various plants; 4) a kind of pillar (軍隊の陣形, クシャ草の一種, さまざまな植物の名前, 石柱の種類)

(4) 中性名詞 (vajram)

1) steel; 2) a kind of talc; 3) thunder-like or severe language; 4) a child; 5) emblic myrobalan; 6) the blossom of the sesamum or Vajra plant; 7) denunciation in strong language; 8) a particular posture in sitting (話の一種, 雷のような激しい言葉, 子供, 植物, 威嚇, 坐相の一種)

以上のように、vajraには多くの意味があるが、(1)の形容詞からいうと、1) 堅固な、2) 激烈な、3) 枝分かれした、ジグザグの(稲妻形の)、4) 「十字形の」という4種である。このうち、3)と4)は、それぞれ「堅固なくダイヤモンド」と、「激烈なく稲妻>あるいはその具象化である<金剛杵>」との関連を想起させる。

さらに(2)~(4)の名詞を大別すると、1. ダイヤモンドあるいは鋼<sup>はがね</sup>のような堅固なもの、2. 電撃、稲妻あるいはそのように激烈なもの(武器としての金剛杵、言語)、3. 植物の一種、4. その他(陣形、座相、石柱、子供など)の四つになる。それらの内容も基本的にはベートリンク [Böhtlingk 1990] と一致すると言えよう。

以上のように、おおよそvajraは、古いヴェーダ文献には「電撃、稲妻」として、その後に展開した文献、特に文学や法典類などでは「ダイヤモ

ンド]あるいは「鋼」という硬質のものを含むようになるのである。その詳細な素材の検討は後述することにして、これを辞書による限りでのとりあえずの字義としておく。

## 2. Vajraとその語根動詞

マクドネル [Macdonell 1976]<sup>9</sup>は、語源としての動詞の下位に名詞を体系づけて掲載する。その説明によれば、vajraには1) thunderbolt, 2) adamant, diamondという二つの意味があり、1) thunderboltについては、「インドラ神や他の神々の神秘的な武器、破壊的呪文・魔法」と解説し、2) adamant, diamond (堅固なもの、ダイヤモンド)の方は、「一般的には中性名詞」と付記し、これに関連する動詞として、括弧付きで、 $\sqrt{vaj}$  (to be hard or strong) を措定している。

動詞 $\sqrt{vraj}$ については、別項目で掲載しているが、その説明では $\sqrt{vraj}$ は一類動詞で「動く、進む」「到達する、得る」「出発する、離れる」という動きに関する意味の他、「逆らう、敵を攻撃する」(to go against, attack an enemy (*vidviṣa*)) という意味もあるとするが、vajraと関連付けてはいない。

次にモニエル [Monier 1899]<sup>10</sup>を見ると、動詞 $\sqrt{vaj}$ はおそらく $\sqrt{vraj}$ の崩れた形であるとして、それぞれ以下のように説明する。

$\sqrt{vaj}$ : cl. 1. P. *vajati* (pf. *vavāja*, fut. *vajitā* &c. , Gr.) , to go, Dhātup. vii, 78: Caus. or cl. 10. P. *vājayati*, to prepare the way to trim or feather an arrow (*mārga-*, or *mārgaṇa-saṃskāre*) , Dhātup. xxxii, 74.

$\sqrt{vraj}$ : cl. 1 , P. *vrajati*, to go , walk , proceed , travel , wander , move. Dhātup. viii , 79, to go against , attack (an enemy; also with [*vidviṣam*])

まず、語根 $\sqrt{vaj}$ は「行く」あるいは、「道を整える、弓矢に羽根を付ける」という意味であるが、 $\sqrt{vraj}$ は「行く、歩く、前進する、歩き回る」等の他に、「[敵を] 攻撃する」という意味があるから、稲妻の威力に関連するのはこの語根 $\sqrt{vraj}$ に由来すると想定したものと思われる。ただし、

本辞典では $\sqrt{vaj}$ の意味が (to go) とされているように、 $\sqrt{vaj}$ そのものの解説ではなく、明らかに $\sqrt{vraj}$ と同一視した結果、このような記載をしたものと考えられる。

モニエルの説明で注目されるのは、*ugra*, *ojas*, *vajra*, *vāja*から推定される語源として、「堅固にする、固くする」を意味する動詞 $\sqrt{vaj}$ あるいは $\sqrt{uj}$ を指示している点である<sup>11</sup>。また、*ugra*の項でも、この語は「 $\sqrt{uc}$ に由来するとされるが、おそらくは $\sqrt{uj}$ あるいは $\sqrt{vaj}$ に由来するものである。そして、*ojas*, *vajra*, *vāja*もまた同様」<sup>12</sup>と述べている。これら*ugra*、や*ojas*-は水や光明、エネルギー、力などという意味であるから、明らかに「稲妻、雷電」という意味の*vajra*と同類の語源を意味し、ダイヤモンドという意味ではない。

ターナー<sup>13</sup>もモニエルと同じく、*vajra*の語源に $\sqrt{vaj}$  (be strong) を明記し、この動詞から派生した語として、*ugra*-, *ojas*-, *ojman*-, *vajra*-, *vāja*-をあげていることが指摘できるし、通常の辞典ではないが、『リグ・ヴェーダ』(RV)の最も詳細な辞典であるグラスマン[Grassman 1955]<sup>14</sup>によれば、語根*vaj*, *uj*は同項目で、*rege sein* *kräft sein*とし、*vajra*をその派生語の一つとする。

以上のように、*vajra*の語根は「堅固にする、強くする」を意味する一類の動詞 $\sqrt{vaj}$ , *uj*であって、モニエルが、その元の形とも言われる $\sqrt{vraj}$ 「歩く、動く、[敵を]攻撃する」であるとする解釈は無理であろう。そしてこのヴァジュラはインド神話では常にインドラ神の武器として知られるものである。

## 第2章 リグ・ヴェーダのインドラ神と *vajra*

### 1. インドラ神と雷霆の系譜

インドラは天空神と似た性格を持つが、その性格はディヤウス(Dyaus)に帰すべきである。ディヤウスは起源的にインド・ヨーロッパ語族共通時代にさかのぼることができる最も古い神である。そのことはDyaus (< $\sqrt{dyut}$  “輝く”) という語形から言える。この語形はギリシャ語のゼウスZeus (Djeus) と同語源であることを示し、またディヤウス・ピタル (Dyaus-pitar 天なる父) というサンスクリット語形はギリシャ

神話のゼウス・パテール (Zeus Patir), ローマ神話のユピテル Iuppiter (Dyu-piter 父なる神) と対応する。しかし、『リグ・ヴェーダ』には、ディヤウス単独の讃歌はなく、大地の神プリティヴィー (Pṛthivī) と常に対をなして dyāvapṛthivī と呼ばれ、讃歌が捧げられた。<sup>15</sup> この二人の子がインドラである (4.17)。

インドラの出生は特異である。彼自身は生まれることを欲せず、母は非常に長く彼を体内に宿し (3.48; 4.18), 母は神々の嫉妬から彼を守るために生まれた後に彼を捨てた。彼の父も彼の力に敵意をもっており、おそらくその自衛のために父親を殺戮した。この特色は嵐の雲を雲散霧消させる光明の概念に由来する。彼は生まれてから天空を輝かせる (3.44) と伝えるのも、この説の根拠となる。

インドラは様々な点でギリシアのゼウス (Zeus), ローマのジュピター (Jupiter), チュートン (Teuton 北方ゲルマン) 人のトール (Thor) 神などと類似している。これらはみな天空神であり、宇宙の支配者である。また彼等は戦闘神であり、杵 (雷霆) という共通の武器をもつ。例えば、鍛冶神トゥヴァシュトリは、ヴリトラと戦うインドラの武器 [ヴァジュラ] を作ったが、ギリシャにおいては鍛冶神ヘファイストス (Hephaistos) <sup>16</sup> が、テュフォンを打倒したゼウスの武器である雷霆を作ったとされる。

また、北欧神話の雷神トール (古ノルド語ではソール <Þórr>) はブロックとエイトリ兄弟が作った槌あるいは杵であるミョルニル (Mjöllnir) <sup>17</sup> を用いて巨人を撃ち殺す。トール神はインドラ神と同じように常に槌を持った姿で表され、北欧の多くの神殿で見いだされたという。<sup>18</sup>

## 2. インド神話におけるインドラ神

インド神話において、インドラ (Indra) は武勇の神であり、インドの先住民を征服し、アーリアンに勝利をもたらす神である。<sup>19</sup> また自然神としては天空の神、特に雷を操る雷霆神であり、旱魃や暗黒の悪魔を克服し、光の勝利あるいは水の開放をもたらす。これが神話的な彼の性格を規定するといつてよい。

『リグ・ヴェーダ』(RV) の中には250の讃歌がインドラに捧げられているが、これは全体の四分の一に及ぶ数である。そもそもインドラ神はインド・イランの共通時代に遡る古い神であり、紀元前14世紀のアナトリ

ア半島を支配したヒッタイト王スビルリウマ (BC1380-1346) とミタンニ王マティワザとの間に結ばれたヒッタイト条約の中にも、ミトラ、ヴァルナ、ナーサティア (アシュヴィン双神) の名とともに、IndarあるいはIndaraの名で記されていることはよく知られている<sup>20</sup>。

その姿は黄褐色 (hari) で<sup>21</sup>、頭髪も髭も同じく黄褐色で (10.96.5, 8; 10.23.4), 暴風神のマルト神群を従える。二頭の名馬ハリ (hari) の曳く戦車に乗って空中を駆けめぐり (10.96), 神酒ソーマを飲んで、士気を高揚させて敵と戦う。その時、神々の大工(鍛冶神)トヴァシュトリ (tvastṛ) の作った武器であるヴァジュラを振るい、電光と雷鳴を轟かせて敵対するヴリトラ (vr̥tra) を殺戮する<sup>22</sup>。

### 3. リグ・ヴェーダにおけるインドラ神

『リグ・ヴェーダ』(1-85-9, 8-29-4) では、インドラ神は蛇の姿をとるヴリトラをヴァジュラ (電撃) で粉碎し、水と光明を人間界に解放したという。そのありさまは、次のように述べられる。

1. 名匠トウヴァシュトリ (工巧神) が、いみじく作られたる黄金・千鈞のヴァジュラ (電撃) を転現せしめたる時、インドラは〔それを〕手にとれり、雄々しき業わざをなさんがために。彼はヴリトラ (悪魔) を殺したり、おびただしき水を流出せしめたり。(1.85.9) 23 [辻 1970:63]
2. (インドラ) は手中に置かれたるヴァジュラ (電撃) をたずそう。それにより彼は仇敵 (ヴリトラ等) を撃滅す。(8.29.4.1) [辻 1970:228]
3. われは今宣らん。インドラの武勲 [の数々] を、ヴァジュラ (電撃) 手に持つ〔神〕が、最初にたてしところの。彼はアヒ (「蛇」=ヴリトラ) を殺し、水を穿ちいだし、山々の脾腹を切り裂いた。(1.32.1) [辻 1970:150]
4. トウヴァシュトリ (工巧神) がインドラのために鳴り響く(〔辻 1970:152〕注(1) で、「鳴り響く」を「太陽のごとく輝く」とする) ヴァジュラを造った。(1.32.2)
5. 鳴きつつ〔仔牛のもとに赴く〕乳牛のごとく、水は流れて、速やかに海に向かって落下せり。(1.32.2)

6. 寛容なる〔インドラ神〕は飛び道具として、ヴァジュラを執った。  
(1.32.3)
7. 彼は蛇族の初生児なるもの(アヒ)を殺した。(1.32.3)
8. そのとき太陽・天界・暁紅を出現せしめ、爾後汝は実に敵対者を見  
出いださざりき。(1.32.4)〔出典：辻直四郎『リグ・ヴェーダ讃歌』岩  
波書店, 1970, p.150〕

上記のように、インドラ神はヴァジュラによってアヒ(蛇=ヴリトラ)を殺し、水を穿ちいだしたとするが、ヴリトラvr̥traとは「妨げるもの」、すなわち空を覆う雲であり、旱魃の悪魔である。したがって、雷霆(vajra)を操る雷神インドラがこれを打ち破り、水と光明を人間世界(地上)にもたらすという、自然現象をテーマにした神話なのである。

「鳴きつつ〔仔牛のもとに赴く〕乳牛のごとく、水は流れて、速やかに海に向かって落下せり」とは、まさに電撃と雷鳴をともなう雨をイメージしている。なお、インドラ神を「ヴァジュラを手、あるいは腕に持つもの」と称するのは、このためである。

#### 4. インドラ神の異名としてのvajra関連語

RVにおけるvajraについては、すでにBlinkenberg<sup>24</sup>が比較文化の視点から、Macdonell<sup>25</sup>が厳密な文献学を踏まえた分析をしているが、ここでは彼等の研究を踏まえて、ヴァジュラとインドラ神の関係を示す術語について、さらに厳密に考究してみたい。

筆者の見る限りRVにおけるvajraの用例は合計286件である。それらのヴァジュラを雷霆と訳する根拠は前に述べたが、ヴァジュラはインドラ神に結びつけられる最も適当な武器とされる。そのインドラの別名には、vajra-dakṣiṇā(ヴァジュラを右手に持っている)、vajra-bāhu(ヴァジュラを手を携えている)<sup>26</sup>、vajra-bhṛt(ヴァジュラを携えている)、vajrivat(ヴァジュラを腕とする)、vajra-vah or -vāh(ヴァジュラを振るう、持つ)、vajra-hasta(ヴァジュラを手にする)、vajrin(ヴァジュラを持つ)、suvajra(よきヴァジュラを持った)などが見られように、ヴァジュラに関連するものが最も多い。<sup>27</sup>

その中でも代表的なのはvajrin, vajra-bāhu, vajra-hasta(1.32.1, -15:

1.85.9; 2.12.12, -13, 2.19.2a, 2.33.3a)<sup>28</sup>であり、いずれも「vajraを(手あるいは腕)とする」という意味の術語である。RVにおけるこれらの使用頻度を見ると、主なものは、vajrin (35件: vajriは79件), vajrī (18件), vajrahasta (19件), vajrabāhu (17件)となっている。

なお、後代の密教で「金剛手」あるいは「執金剛」などと訳される vajrapāṇi (ヴァジュラを手を持つ [者]) と vajradhara (ヴァジュラを保有する者) は、RVには見られないことを敢えて指摘しておく。

## 5. Vajraの形状と素材

ヴァジュラの形状については、上に引用したRVのように「いみじく作られたる黄金の千鈷」(vajraṃ sukṛtaṃ hiraṇyaṃ sahasrabhṛṣṭim) とされる。その他にも「千鈷の“かね”のヴァジュラ」(vajra āyasaḥ sahasrabhṛṣṭir 1.80.12), 「千鈷のヴァジュラ」 vajraṃ sahasrabhṛṣṭim (6.17.10), 「千鈷」 sahasrabhṛṣṭi (9.83.5, 9.86.40) のように、ヴァジュラの形状は千鈷という放射型のイメージがある。それ以外にも、「百鈷のヴァジュラ」(vajreṇa śataparvaṇā 8.6.6), 「四角の」(caturaśrim, 4.22.2), 「鋭い」(tigmam, 7.18.18) などもある。ただし、その用例は例外的であると言わざるを得ない。

素材に関わるものとしては、ダディーチャ (dadhīca) 仙の骨とする伝承がある。それはRVの「インドラはダディーチャの骨から、制御できないヴリトラを九十九 [の方法] によって [多数のヴリトラを] 殺した」<sup>29</sup> という叙述を源とする。この伝承は後代になって *Mahābhārata* (Mbh)<sup>30</sup> 等においてさらに変更が加えられつつ、「ダディーチャ [仙] の骨から破壊的な悪魔であるヴァジュラが造られた」<sup>31</sup>。「以前に、偉大なるインドラ [神] のヴァジュラがヴリトラの殺害において造られた。まさに十の方法、または百の方法で、そのヴリトラの頭を砕いた」<sup>32</sup> などのように述べられる。

しかし、それは「インドラの黄金のヴァジュラ」(indrasya vajraḥ ... hiraṇyayaḥ 1.57.2), 「黄金の腕であるヴァジュラを持つ [もの]」(vajrī hiraṇyabāhuḥ 7.34.4), 「褐色の<かね>のヴァジュラ」(vajro harito ... āyaso 10.96.3), 「褐色の武器であるヴァジュラ」(āyudhaṃ vajraṃ ... harim 3.44.4), 明るく輝くヴァジュラ (vajraṃ sukrair 3.44.5), 「<か

ね>のヴァジュラ」(vajram āyasam 1.52.8) などのように, vajraが金属(hiraṇya, āyasa)と関連づけられる。

Hiraṇyaは一般的には金(gold)であるが, 銀(silver)を意味する場合や, 貴重な金属一般(any precious metal)を意味することもある。āyasa(かね)<sup>33</sup>がvajraに関連づけられて用いられる例は, RVでは少なくとも5例以上ある。āyasaは一般的には「鉄(iron), 鉄製の」と訳されているが, これがそのような具体的なものを意味するかどうかは疑問である。リグ・ヴェーダが成立した時代(BC12 ca)に, 製鉄技術が知られていたか, どれほど普及していたかは, 疑問視されているし, 現在の研究状況からして, この問題を軽々に断定することはできない。<sup>34</sup>

たとえD.コーサーンピー(ISIH 70-71)の主張するように, vṛtraが悪魔ではなく, 「堰」「ダム」を意味したとしても, 鉄製の武器vajraでダムを決壊させて, 河川が停止状態になった(tastabhānaḥ)というヴェーダの解釈は, 巨大な破壊兵器を想定しない限り, あり得ないであろう。<sup>35</sup>したがって, RVにおいてvajraを形容するhiraṇyaはやāyasaを, 金や鉄と言った具体的な鉱物とする解釈は採用できない。

おそらく, hiraṇyaもāyasaも, 金, 銀, 鉄という具体的な物より, metallic(金属製)なもの, 最も堅固なものという程度の意味であるのだろう。またその輝きも重要な要素であったに違いない。

そのことを明確に示すのが, 辻[1970:150]の「飛び道具」(1.32.3)という訳である。その原語は実はsāyaka(missile, arrow)であり,<sup>36</sup>その限りでは問題がなさそうである。辻[1970:172]は別の同様の箇所でも「インドラはヴリトラの急所にヴァジュラ(電撃)を飛ばしたり」(8.100.7cd)<sup>37</sup>と一貫した翻訳を行っている。

この「ヴァジュラ(電撃)を飛ばしたり」の原文を見ると, vajram... apīpatat(Caus.aor)である。ここで辻が「飛ばしたり」と訳した動詞apīpatatの語根は, √pat(落ちる)であるから, この箇所は「ヴァジュラを落としたり」と訳することができる。まさにこれは落雷をイメージさせる文脈である。

ただ問題はこのような表現が次第に具体的なイメージを強化し, āyudha(武器)としての金剛杵を形成していった可能性は否定できない。たとえば, 「vajraを武器として手に持つ」(vajram hasta āhitam,

hasta āyudham) (RV 8.29.5) という言葉は、手の中に収まる具体的な武器を想定させることになり、素材や形状もより具体化していったはずである。

なお、『アタルヴァ・ヴェーダ』ではそれが棍棒として具象化される。さらにṢaḍviṃśa-Brāhmaṇaではdiamondとしての用法もあったという。<sup>38</sup>この問題については、後述するつもりである。

[本稿は、平成16～17年度科学研究費補助金・基盤研究 C (2)「金剛般若経の成立と展開についての研究」の研究成果の一部である。]

## (Footnotes)

- 1 M. Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary, Etymologically Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European Languages*, Oxford University Press, 1899では、この意味の他にvajraは、「呪文あるいは魔力 (spells or charms) といった破壊的な、どのような神話の武器にも適用される」という言語の意味を加えている。これはマントラ (真言) としての機能であろうが、この説明でも破壊的 (destructive) とされる点が重要である。
- 2 R. L. Turner, *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*, Oxford University Press, 1966. #11202, 11204.
- 3 Manfred Mayrhofer, *Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen, A Concise Etymological Sanskrit Dictionary*, Heidelberg, 1956.
- 4 また、Mayrhofer [1956, 126]は以下の記述は確実ではないとしながら、ギリシャ語で破壊を意味する「arvūl」, 「裂く」を意味するトカラ語 A, Bのwāk-その他、ソクド語のvz'rk (buzuruk) やインド・アーリヤ語起源のフィンランド語でハンマーを意味するvasara, トカラ語 A, Bのwasir- コータン・サカ語のvasira-などが共通語源として指摘されている。
- 5 Otto Böhtlingk und Rudolph Roth, *Sanskrit-Wörterbuch*. Herausgeben von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, Neudruck der St. Petersburg Ausgabe von 1855-1875. Reprint Edition, Mothilal Banarsidass: Delhi, 1990. vajraの合成語の後分として、indra-vajra, indra-vajrā, upendra-, karma-vajra, jñāna-, dāna-, nīca-, līlā-, saivāla, śoṇa-, svarṇa- を付記している。
- 6 Chr. Blinkenberg, *The Thunderweapon in Religion and Folklore, A study in Comparative Archaeology* (Cambridge, 1911, p.113) では、これをa name for plants containing a milky juice (euphorbia) とする。
- 7 Vaman Shivaram Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised & Enlarged Edition, 1986, Kyoto: Rinsen.
- 8 このうち第1の「雷電」には、the weapon of Indra (said to have been formed out of the bones of the sage Dadīchi) というŚakuntalā 2.16の例を引用し、第3には、an instrument for perforating jewelsとして、Raghuvaṃśa 1.4を引用、第4にはUttararāmācarita 2.7とRaghuvaṃśa 6.19を引用する。第5は「酸っぱい粥」という意味であるが、珍しい用法である。
- 9 [Macdonell 1976] A. Macdonell, *A Practical Sanskrit Dictionary*, Oxford University Press, 1976.

- 10 M. Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1899, pp.913-914.
- 11 Another  $\sqrt{v}$  vaj or uj, 'to be hard or strong', may be inferred from ugra, ojas, vajra, vāja (qq. vv.), the last of which gave rise to the Nom. vājaya, q. v. [For cognate words see under *ugra* and *ojas*.]..なお、 $\sqrt{v}$  vajと $\sqrt{u}$  ujを同じ語根と見るのは、Grassman [1955]も同様である。
- 12 そのugraはpowerful, violent, mighty, impetuous, strong, huge, formidable, terribleの他, high, nobleやcruel, fierce, ferocious, savage; angry, passionate, wrathful; hot, sharp, pungentなどを意味する形容詞であり, またojasは「強さや力, 活力」(bodily strength, vigour, energy, ability, power)などの他, 「水, 光明, 輝き, 光沢」(water, light, splendour, lustre)を意味する中性名詞とする。
- 13 Turner [1966: #11202, 11204]。なお、ターナーによればvajraはPāliではvajira-, Prākṛitではvajja-, vayara-, vaira-とする。
- 14 Hermann Grassman, *Wörterbuch zum Rig-Veda*, Otto Harrassowitz:Wiesbaden, 1955, #1196.
- 15 針貝邦生『ヴェーダからウパニシャッドへ』(清水書院, 2000, pp.34-45), 辻直四郎『辻直四郎著作集』第三巻<文学>(法蔵館, 1982, pp.230-231)を参照。
- 16 ヘパイストスはオリンポス十二神の一つで火山の神, 鍛冶の神で, ローマ神話のウルカヌス (Vulcanus) 英語読みでヴァルカン (Valcan) にあたる。上記の鍛冶の神については, M. エリアーデ著, 荒木・中村・松村訳『世界宗教史 I』「冶金術の宗教的文脈——鉄器時代の神話」(筑摩書房, 1991, p.58)を参照した。
- 17 文字通り「打ち砕くもの」という意味。トール神が持つことから「トールハンマー」あるいは「ウォーハンマー」と呼ばれる。投げれば相手を打った後に再び手元に戻り、掲げることで雷を呼び出すこともでき、大きさも自在に変えることができるとされる。ソール神とインドラの類似性については, M. エリアーデ著, 島田裕巳・柴田史子訳『世界宗教史 I』「アース神族治テュール, ソール, バルドル」(筑摩書房, 1991, pp.172-173)を参照。「エッダ」では、オーディンとヨルズの子。
- 18 フレイザー (James G. Frazer) によれば, 古代ゲルマン人の雷霆神ドナル, あるいはトゥナル, チュートン人の雷神ドナル, トゥナル, トール (Donar, Thunar, Thor), イタリアの雷神ユーピテル, スラブ人の雷神ベルン, リトゥアニア人の主神ペルクナス, あるいはペルクンスなどの雷や雨の神が, カシワ (の樹) と並んで, 彼等の万神殿の主神であり, アーリア系民族に共通の

- 信仰であったことが述べられている。(フレイザー著・永橋卓介訳『金枝篇』第二巻、岩波書店、1990年版、pp.31-36)。なお、バシヤムはインドラ神が雲中のヴリトラを打ち倒す讃歌について、マルドゥク神が混沌の神ティアマトを打ち倒し、宇宙を創造するという、メソポタミアの天地創造神話の異形と推測している。A. L. Basham, *The Wonder that was India*, London, 1954(日野・金沢・水野・石上訳『バシヤムのインド百科』山喜房仏書林、平成16、p.392)。
- 19 インドラがヴァジュラを用いてアーリアンの敵を粉碎する様子は、『リグ・ヴェーダ』に次のように説かれている。(ムドガラMugada仙の言葉)「敵意を抱き殺害せんとする者のヴァジュラ(武器、棍棒)を阻止せよ、インドラよ。あるいはダーサ(先住民)あるいはアーリア人の凶器を、寛容なる[神](インドラ)よ、遠方に駆逐せよ。」(10.102.3) [辻直四郎『リグヴェーダ讃歌』岩波書店、1970、p.332]。この讃歌はムドガラ仙が、戦車競争に臨んで、インドラに勝利を祈願するものである。辻がここで「凶器」と訳すのはvadha「武器」であり、ヴァジュラはアーリア人ばかりでなく、ダーサといわれる先住民の武器とされる。
- 20 辻直四郎『インド文明の曙—ヴェーダとウパニシャッド—』岩波書店、1967、pp.28ff.
- 21 ししば黄金(hiraṇyaya)として描写されることもある(1.7.2)。
- 22 針貝邦生『ヴェーダからウパニシャッドへ』清水書院、2000、p.42。なお、RVではvajraは一般にトヴァシュトリ(tvaṣṭr)が造ったとするが、例外的にインドラの父(ディヤウスdyaus)が造ったとする箇所もある(2.17)。
- 23 tvaṣṭā yad vajraṃ sukṛtam hiraṇyaṃ sahasrabhṛṣṭim stuapāvartayat/ dhatt indro nari apāmsi kartave ahan vṛtraṃ nir apām aubjad arṇavam// [Barend A. Van Nooten & Gary B. Holland 1994:50]
- 24 Blinkenberg [1911, 113]によれば、RVにおけるヴァジュラはインドラの武器で、1,000の突先、100の刃先があるという。それはāyasa(鉄製もしくは銅製)といわれ、あるいは一カ所が石(āśman)の鉄製か、黄金製(hiraṇyayas)といわれる。
- 25 A. A. Macdonell, *Vedic Mythology*, Strassburg, 1898. Reprint: Motilal Banarsidass: Delhi, 1974, p.55.
- 26 通常はインドラ神に帰される属性であるが、例外的にルドラ神(vajrabāho rudra- 2.33.3)のことでされる。ルドラ神も最強の神であり、インドラ神の配下であるマルト神群の交友関係にある。ルドラは台風のような強力な力を持

- つ神であり、怖ろしい獣のような荒々しく、破壊的な神である。ヴェーダの聖仙はルドラの脅威を他に振り向けるために、この讃歌を捧げる。
- 27 Hermann Grassman, *Wörterbuch zum Rig-Veda*, Otto Harrasowitz: Wiesbaden, 1955, p.1195. その他, 「雄牛」 *vṛṣaṇa-*, *vṛṣabha-* (5.40.3. 7.49.1), 「寛容な神」 *maghavan* という語も見られる。
- 28 翻訳は [辻 1970:150, 152, 155] を参照されたい。
- 29 *indro dadhīco asthabhir vṛtrāṇi apratiṣkutaḥ/ jaghāna navatīr nava//* (1.84.13)
- 30 インドラがブラフマーにヴリトラを殺す方法を尋ね、ブラフマーがダディーチャの骨によって造られたヴァジュラでヴリトラを殺す方法を教示する。さらに、身を捨てたダディーチャの骨からトヴァシュトリがヴァジュラを作り、インドラがヴリトラを殺す話は [Mbh 3.98] 以下に述べられる。なお、マハー・バーラタのテキストは, *The Mahābhārata, text as constituted in its critical Edition*, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1971 を使用した。
- 31 *dadhīcasyāsthito vajraṃ kṛtaṃ dānavasūdanaṃ//* (1.127.12c,d)
- 32 */purā kṛtaṃ mahendrasya vajraṃ vṛtranibarhaṇe/ daśadhā śatadhā caiva tacchīraṇaṃ vṛtramūrdhani//* (1.158.47)
- 33 *ayas*, *āyasa* を日本語で「鉄」ではなく、「強剛な素質」, 「かたくて丈夫なもの」という意味で「鋼」と訳すとしても、一般的には「硬く鍛えた鉄, 鋼鉄」という意味で用いられる (広辞苑, 漢字源) ため, ここでは [しろがね・くろがね・こがね・あかがね] などの金属を総称するという意味で「かね」と訳しておくことにした。
- 34 D. チャットーパーディヤーヤ著, 佐藤任訳『古代インドの科学と技術の歴史 初期段階』(東方出版, 1992, p.430)。多くのインド人研究者は、この問題については様々な見解を持っている。ヴィバ・トゥリパティは、これらの問題を要領よく要約しているので、それを参照していただきたい。なお, N.R. バネルジーは、紀元前一千年頃にアリア人が製鉄技術をインドに伝えたものと考え、インドにおける鉄器時代の区分については以下のように区分している。(a) 前1300—前1000年, (b) 前1000—前800年, (c) 前800—前600年, (d) 前600—前200年。しかし、最初の (a) の区分の前1300年というのは、ラジャスタンのアハル (Ahar) とノホ (Noh) のわずかな証拠に基づいたもので、証拠が不十分であり、あまり明確でないとしている (N. R. バネルジー 「国家形成とインドの物質文化への鉄生産の影響」 [D. チャットーパーディヤーヤ著, 佐藤任訳『古代インドの科学と技術の歴史 自然科学の理論と理論原理の形成』所

取] 東方出版, 1993, pp.331-343. esp. pp.332-333.)

また、『チャラカ・サンヒター』Caraka-saṃhitā i.27.7には鉄 (ayas) は、ひどい皮膚の腫れ物や、精系静脈瘤などのために、湿布薬として用いられていた。またāyasaは微細な鉄の粉末、または特別に調整された鉄 (kālaharajas, kṛṣṇāyasa, kālāyasarajas) があり、外用や内服用に用いられていたことが知られる。D. チャットーバーディーヤーヤ著、佐藤任訳『古代インドの科学と社会—古典医学を中心に』(同朋舎, 1985, p.98-99) 参照。

35 D. チャットーバーディーヤーヤ著・佐藤任訳, 前掲書, p.422.

36 Barend A. Van Nooten & Gary B. Holland [1994:20]

37 ni śīṃ vṛtrasya marmaṇi vajram indro apīpatat// (Maṇḍala 8.100.7cd) [Barend A. Van Nooten & Gary B. Holland 1994:416]

38 Turner [1966:653]. 11204 vajraの項。